

研究資料

小学校教員を対象とした「多様な動きをつくる運動」の意識調査 —用具を操作する運動における動きの指導及び評価に着目して—

A survey of elementary school teachers' awareness of "exercises that create diverse movements" - Focusing on teaching and evaluating movements in exercises that involve the manipulation of equipment

鞠子 佳香⁽¹⁾・近藤 智靖⁽²⁾
Yoshika Mariko, Tomoyasu Kondoh

Abstract

This study aimed to clarify elementary school teachers' attitudes toward teaching and evaluating movements involving equipment manipulation in "exercises that create diverse movements."

The participants were 212 teachers working at public elementary schools in Saitama Prefecture, and the survey focused on the perceived difficulty of teaching and evaluating individual movements using hoops, balls, and ropes.

The results indicated that teachers generally felt capable of teaching and evaluating movements; however, movements involving hoops and complex actions were perceived as relatively difficult. In addition, teachers tended to evaluate movement performance based on their own experience.

These findings suggest the importance of providing teachers with guidance on instructional strategies and evaluation methods for specific movements. In particular, further research is needed on classroom practices related to hoop-based and complex movements.

Keywords: physical fitness classes, difficulty in teaching and evaluating movements, teaching experience

I. 緒言

平成 20 年改訂の学習指導要領より小学校低学年及び中学年の体づくり運動領域に「多様な動きをつくる運動（遊び）」が取り入れられた。導入の背景には、児童の体力低下や、就学前からの運動経験や運動習慣が二極化しているという問題があることから低学年及び中学年の段階で体の基本的な動きを培っていくことが

ねらいとして示された。この考え方は、現行の学習指導要領にも踏襲されている。

この「多様な動きをつくる運動（遊び）」では、体の基本的な動きを身につけ、高めることが保証されるような授業実践が求められるものの、現状は学習内容として取り扱われる動きが、十分に児童に身に付いていないといった問題が指摘されている（清田, 2019）。教員を対象とした実態調査からも、この領域の指導の

(1) 女子栄養大学 Kagawa Nutrition University

(2) 日本体育大学 Nippon Sport Science University

困難さや取り扱いづらさが報告されており（白旗, 2015, 伊藤, 2018）, 児童に動きが身に付かないことの遠因になっていると考えられる。

長野（2021）は、教員を対象に、体づくり運動の指導で困っていることや情報提供してもらいたいことについて調査したところ、効果的な場づくりや実践例の紹介、そして学習評価の確立が上位となっていた。また、篠原（2024）は、多様な動きをつくる運動（遊び）の指導に関する意識調査を行っており、長野の研究と同様に、学習評価の方法が教員の困り事として挙がっていた。この調査結果から、教員は児童に対して効果的に動きを指導し、評価することに困難感を持っていることが推察されるが、これらは領域全体に関する調査となっており、教員は領域全体に対する指導や評価に困難感を持っているのか、もしくは特定された内容に対してそうであるのか、が見えてこない。また特定された内容であるならば、具体的にどの内容に効果的な指導や評価ができていないのか、その詳細を明らかにすることで今後の実践研究に繋がる方向性を示唆することができると思われる。

そこで、領域内の個別の動きに対する教員の指導と評価に焦点をあてて意識調査を行うことによって、教員が持つ困難感の具体的な問題点が抽出されるのではないかと考えた。それにより教員へ情報提供していく内容や実践研究の方向性が焦点化され、問題解決の方途に繋がると思われる。調査に当たっては、学校現場で実施頻度の高い（高田, 2017）、「多様な動きをつくる運動」の用具を操作する運動の動きに着目した。その中でも低学年に比べて動きの難易度が上がり、教員が児童の動きの習得と出来栄を確認する必要がある学習指導要領解説第3.4学年で例示されている指導内容の各動きに絞り、教員が児童の動きを習得させるためにコツやポイントを教えることができているのか、児童の動きが身についたか判断することができるのか、それらの難易について調査項目を設定した。

II. 研究目的

本研究では、「多様な動きをつくる運動」の用具を操作する運動を対象とし、学習指導要領解説第3.4学年で例示されている動きについての小学校教員の指導及び評価意識の調査、分析

を行い、その実態を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1 対象及び手続き

対象者は埼玉県内の公立小学校に勤務する教員とし、2022年1月20日～3月12日にMicrosoft Formsによるweb調査を実施した。調査は埼玉県内52校1119名に依頼し、回答のあった212名（回答率18.9%）を分析対象者とした。

2 調査項目

本研究では、動きの指導及び評価と、教員歴を調査項目として設定した。

動きの指導については「児童の動きを習得させるためにコツやポイントを教えることができているか」を、動きの評価については「児童の動きが身についたか判断することができるか」を、設問文とした。そして、これまでの指導経験を踏まえて^{註1)}、その難易を6件法で、1:非常に難しい, 2:難しい, 3:少し難しい, 4:少し易しい, 5:易しい, 6:非常に易しいとし、回答を求めた。

取り扱う動きについては、高田（2017）の先行研究をもとに、多様な動きをつくる運動の学校現場で実施頻度の高かった、用具を操作する運動に絞った。そしてその中でも実施件数が多かった、フープ、ボール、縄を使った運動に着目し、これらの3つの用具に関して学習指導要領解説第3.4学年の中で例示されている動きの中から12の動きを項目として設定した^{註2)}。

教員歴は、教員の経験年数によって回答の傾向に違いがみられるかを把握するために設定し、教員歴1～10年と11年以上に分けて分析を行った。なお、体育科に関連する先行研究において、教員としての経験年数を踏まえて分析する場合、初任（1～4年）、中堅（5～14年）、ベテラン（15年以上）の3区分（鈴木, 2011）や、若手（5年未満）、中堅（5～15年未満）、ベテラン（15年以上）の3区分（嘉数, 2015）、また、初任期（1～3年）、自立期（4～10年）、中堅期（11～20年）、ベテラン期（21年以上）といった4つの区分（白旗, 2013）を用いる研究があり、区分や年数については様々である。本研究では10年を一区切りとして、分析をす

ることとする。10年を区切りとしたのは、白旗(2013)の区分を踏まえており、主に学級担任としての役割を担い、体育授業の指導経験が相対的に少ないと思われる自立期までの期間と、相対的に体育授業の経験を積み上げている中堅期以降とで、結果の差異が生まれるのではないかと考えたからである。

これらは筆者が調査項目案を考え、その後、体育科教育学を専門とする研究者2名で項目及び回答選択数を検討し、作成した。調査項目については、表1に示す。

3 統計処理

全てのデータはコロモゴロフスミルノフ検定で正規性を確認した。正規性が認められなかったため、ノンパラメトリック検定を採用し、教員の動きの指導と動きの評価の回答差異については、ウィルコクソンのT検定を行った。また、各用具と用具内の回答差異については、フリードマン検定を行い、有意差が認められた項目について多重比較検定(ボンフェロー

ニによる部分順位法、ウィルコクソンのT検定)を行った。教員歴による回答差異については、マンホイットニーのU検定を行った。すべての解析はIBM SPSS Statics 28.0を用い、統計学的有意水準を5%未満に設定した。

4 倫理的配慮

本研究を行うにあたっては、各学校長へ研究の趣旨及び目的、方法、個人情報保護について説明を行い、承諾を得た上で教員への調査を実施した。本研究は、日本体育大学人を対象とした研究倫理審査に関する規定に基づき、倫理委員会の承認を経て実施した(認証番号第021-H184号)。

IV. 結果

1 動きの指導と動きの評価の合計得点

表2は、用具を操作する運動における動きの指導と評価の合計得点を示したものである。動きの指導、動きの評価の各合計は72点満点で

表1 調査項目(カッコ内は選択数)

1. 属性
①教員歴(4)
2. 動きの指導(動きを習得させるためにコツやポイントを教えること)
①なわの前片足跳び:片足をあげて連続跳び(6)
②なわの後ろ片足跳び:片足をあげて連続跳び(6)
③なわの前交差跳び:腕を交差した状態で連続跳び(6)
④なわの後ろ交差跳び:腕を交差した状態で連続跳び(6)
⑤フープの床転がし:フープを前方に転がし、逆回転で戻ってきたフープをくぐる(6)
⑥フープの床転がし~輪くぐり:フープを前方に転がし、逆回転で戻ってきたフープをくぐる(6)
⑦フープの投げ上げ~フープ片手キャッチ:フープを片手で頭上に投げ、片手でとる(6)
⑧フープの腕・手回し:上肢でフープを連続で回す(6)
⑨フープの腰回し:腰でフープを連続で回す(6)
⑩フープの足回し:フープに片足をを入れてステップを踏みながら連続で回す(6)
⑪ボールの両手投げ上げ~両手キャッチ:ボールを両手で頭上に投げ、両手でキャッチする(6)
⑫ボールの片手投げ上げ~片手キャッチ:ボールを片手で頭上に投げ、投げた逆の手でキャッチする(6)
3. 動きの評価(動きが身に付いたか、身についていないかを判断すること)
①なわの前片足跳び:片足をあげて連続跳び(6)
②なわの後ろ片足跳び:片足をあげて連続跳び(6)
③なわの前交差跳び:腕を交差した状態で連続跳び(6)
④なわの後ろ交差跳び:腕を交差した状態で連続跳び(6)
⑤フープの床転がし:フープを前方に転がし、逆回転で戻ってきたフープをくぐる(6)
⑥フープの床転がし~輪くぐり:フープを前方に転がし、逆回転で戻ってきたフープをくぐる(6)
⑦フープの投げ上げ~フープ片手キャッチ:フープを片手で頭上に投げ、片手でとる(6)
⑧フープの腕・手回し:上肢でフープを連続で回す(6)
⑨フープの腰回し:腰でフープを連続で回す(6)
⑩フープの足回し:フープに片足をを入れてステップを踏みながら連続で回す(6)
⑪ボールの両手投げ上げ~両手キャッチ:ボールを両手で頭上に投げ、両手でキャッチする(6)
⑫ボールの片手投げ上げ~片手キャッチ:ボールを片手で頭上に投げ、投げた逆の手でキャッチする(6)

表2 動きの指導と動きの評価 合計点の比較

	指導合計		評価合計		Z	p
	M	S.D	M	S.D		
合計得点(各72点)	45.68	8.64	53.49	10.42	9.74	**

n=212

** : p < .05

ある。

動きの指導の得点は、45.68点で、動きの評価の得点は53.49点であり、動きの指導得点に比べて動きの評価得点が有意に高い結果だった ($Z=9.74$, $p<.01$)。

2 用具ごとの動きの指導と動きの評価の回答

表3は用具ごとの回答の平均得点を示したものである。各設問数は、縄が4問、フープが6問、ボールが2問となっている。

動きの指導の平均得点は、縄が3.73点、フープが3.67点、ボールが4.35点であり、ボールが縄とフープに比べて有意に高い値だった ($\chi^2=83.85$, $p<.01$)。

また、動きの評価の平均得点は、縄とボールが4.59点、フープが4.31点で、縄とボールがフープに比べて有意に高い値であった ($\chi^2=42.39$, $p<.01$)。

3 用具内での動きの指導と動きの評価の回答

表4は縄の各動きの回答結果である。縄の動きの指導では、①前片足跳び(4.60点)が③前交差跳び(3.74点)、②後ろ片足跳び(3.67点)よりも有意に高く、④後ろ交差跳び(2.92点)

が最も低い値だった ($\chi^2=332.87$, $p<.01$)。

縄の動きの評価は、①前片足跳び(4.83点)が、②後ろ片足跳び(4.61点)、③前交差跳び(4.57点)よりも有意に高く、④後ろ交差跳び(4.36点)が最も低い値だった ($\chi^2=106.30$, $p<.01$)。

表5はフープの各動きの回答結果である。フープの動きの指導では、⑧手腕回し(4.15点)、⑥床転がし(4.08点)が高い値を示し、⑩足回し(3.12点)が最も低い値となった ($\chi^2=235.00$, $p<.01$)。

フープの動きの評価は、⑦投げ～キャッチ(4.50点)、⑥床転がし(4.45点)、⑧手腕回し(4.39点)が高い値を示し、⑩足回し(4.10点)が最も低い値となった ($\chi^2=70.54$, $p<.01$)。

表6はボールの各動きの回答結果である。ボールの動きの指導では、⑫両手投げ～両手キャッチ(4.82点)が⑪片手投げ～片手キャッチ(3.90点)よりも有意に高い値となった ($\chi^2=-9.43$, $p<.01$)。ボールの動きの評価も、⑫両手投げ～両手キャッチ(4.72点)が⑪片手投げ～片手キャッチ(4.48点)よりも有意に高い値となった ($\chi^2=-4.83$, $p<.01$)。

表3 用具ごとの動きの指導と動きの評価

	①縄		②フープ		③ボール		χ^2	p	事後検定	
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.				
指導	3.73	0.86	3.67	0.84	4.35	0.94	83.85	**	③>①、②	
評価	4.59	0.95	4.31	0.96	4.59	0.96	42.39	**	①、③>②	
n=212								**: $p<.05$		

表4 縄の動きの指導と動きの評価

縄	①前片足跳び		②後ろ片足跳び		③前交差跳び		④後ろ交差跳び		χ^2	p	事後検定
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.			
指導	4.60	0.96	3.67	1.17	3.74	0.98	2.92	1.16	332.87	**	①>③②>④
評価	4.83	0.91	4.61	1.04	4.57	1.02	4.36	1.14	106.30	**	①>②③>④
n=212										**: $p<.05$	

表5 フープの動きの指導と動きの評価

フープ	⑥床転がし		⑦床転がしくぐり		⑦投げ～キャッチ		⑧手腕回し		⑨腰回し		⑩足回し		χ^2	p	事後検定
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.			
指導	4.08	1.12	3.35	1.16	3.88	1.06	4.15	1.06	3.47	1.12	3.12	1.15	235.00	**	⑧⑤>⑦>⑨⑥>⑩
評価	4.45	1.05	4.23	1.08	4.50	1.00	4.39	1.06	4.23	1.13	4.10	1.14	70.54	**	⑦⑤⑧>⑨⑥>⑩
n=212														**: $p<.05$	

表6 ボールの動きの指導と動きの評価

ボール	⑩両手投げ		⑪片手投げ		χ^2	p	
	M	S.D.	M	S.D.			
指導	4.82	1.00	3.90	1.17	-9.43	**	
評価	4.72	1.00	4.48	1.04	-4.83	**	
n=212						**: $p<.05$	

4 教員歴による動きの指導と動きの評価の合計得点

表7は教員歴10年未満と11年以上の教員の回答結果を示したものである。教員歴1-10年は91名、11年以上は121名であった。

動きの指導の合計得点は、10年未満が44.67点で、11年以上が46.45点であり、有意な差は見られなかった($Z=1.66$, n.s)。動きの評価は10年未満が49.88点で、11年以上が56.21点であった。教員歴10年未満に比べて、11年以上が有意に高い値を示した($Z=4.51$, $p<.01$)。

V. 考察

本研究で得られた結果について次の4つの観点から考察する。

1 動きの指導と動きの評価の合計点の回答

動きの指導の合計点は45.68点、動きの評価の合計点は、動きの指導の値よりも高く53.49点で、72点満点中の6割以上の値だった。この結果から、今回調査対象だった教員は、「多様な動きをつくる運動」用具操作の運動の各動きについては、おおむね指導や評価ができると考えていることが示された。また、動きの指導と動きの評価の回答結果を比較すると、動きの評価に比べて動きの指導の合計点が有意に低く、評価することはできるが、指導することには相対的に難しさを感じている結果となった。

白旗(2013)は、小学校教員に行った調査で、体育の指導が他教科と比較して難しい点について、教え方・伝え方といった指導方法であると回答した割合が最も高い値であったことを報告している。本研究においても、同様に子どもの動きができていないか、できていないかといった評価はできるものの、その動きをできるようにするためにどのように教えたらよいかは相対的にわからないといった意識であったことが推察された。

2 用具ごとの動きの指導と動きの評価の回答

縄、フープ、ボールの動きの指導と動きの評価はフープの回答平均点が最も低かった。つまり、フープの動きの指導や評価は、他の用具に比べて難しさを感じていることが考えられる。

長野(2021)は、教員が授業を構想する際に参考になっている資料は、体育の副読本、小学校体育まるわかりハンドブック、参考書や雑誌が上位に挙がっていることを報告していた。例えば小学校体育まるわかりハンドブック(2020)の「多様な動きをつくる運動」に掲載されている内容は、器械運動、走・跳の運動、浮く・泳ぐ運動といった他領域に比べると、動きの例示は多いものの、それを身に付けるためのポイントやコツの記載は少ない。ただ、数少ない中でも、ボール投げキャッチの動きでは「ボールの動きに合わせて手のひらを下に引いて捕ろう」、縄の跳び方については「縄が近づいてきた時に合せて跳ぶと跳びやすい」といったポイントがあるものの、フープについては全く記載されていなかった。このことから教員はフープに関する動きのポイントやコツに関する知識を十分に理解していないことが考えられる。

また、小学校教員を対象にした体づくり運動の授業実施状況調査報告(高田, 2017)では、授業で実施されている用具操作の運動中、フープは全体の約3割の実施率であった。さらに深谷(2016)は、授業で取り扱っているフープの動きの内容を報告しているが、学習指導要領解説で例示されている、回す・転がす・投げる・とる・くぐる等の動きの報告はなかった。教員は、縄やボールに比べて、フープを使用した授業の実施経験が少なく、フープを使った様々な動きは十分に指導していないことも想定される。

3 用具内での動きの指導と動きの評価の回答

用具内での動きの指導と動きの評価の回答は、縄では④後ろ交差跳びが、フープでは⑩足回し、⑥床転がし～フープくぐりが、共に平均

表7 教員歴による動きの指導と動きの評価の合計得点

	教員歴1~10年 (n=91)		教員歴11年以上 (n=121)		Z	p
	M	S.D.	M	S.D.		
指導合計(72点)	44.67	8.52	46.45	8.69	1.66	n. s
評価合計(72点)	49.88	10.28	56.21	9.71	4.51	**

**: $p<.05$

点が低かった。特に、④後ろ交差跳びの動きの指導の平均点は2.92点で今回調査した12の動きの中で最も低く、指導が難しいという回答だった。

これらの3つは複合的運動であるということが共通しており、試技の際にいくつかの動きを協調させたり、統合させたりしながら実施する動きである。具体的には、④縄の後ろ交差跳びは、視野から外れる条件下で、縄を体の前で交差して回す手首の動きと跳躍する動作を協調させて実施することが求められる。また、フープの⑩足回しは、足首で回しているフープを止めないように、回している足とは別の足でステップを踏みながらタイミングよく回し続ける協調性が必要である。そしてフープの⑥床転がし〜くぐりは、自分で転がしたフープに身体が当たらないようにくぐり抜けるといった二つの運動形態を統合させて実施することが求められる。

学習指導要領（2017）第3.4学年では「基本的な動きを組み合わせる運動」といった内容が例示として追記されており、「跳ぶ」「投げる」「転がす」「回す」といった単一の動きを組み合わせ、発展させていくことが求められている。これは、単一の動きを繰り返していた簡易的な動きに比べて、難易度は上がるものといえる。そのため、教員の回答結果からは、これらの難易度が上がった動きに対する平均値が低く、指導や評価に難しさを感じていることが想定される。

4 教員歴による動きの指導と動きの評価の回答

教員歴による回答の傾向では、動きの指導については教員年数による回答の差異はなかった。動きの評価については教員歴10年未満が教員歴11年以上に比べて難しさを感じている結果になった。

嘉数（2015）は、体育授業において中堅・ベテラン教師は若手教師より子どもたちの運動の躰きを診断できると回答した割合が高いという調査報告をしており、本調査でも同様に、教師自身の経験知を元に子どもの動きを評価している傾向にあることが示唆された。

5 研究の限界

本調査では12の動きに関する指導と評価の意識について調査項目として設定した。各動きの教員の指導経験の有無や児童の動きの達成に関しては、本調査では把握できておらず、教員の困難感の背景的要因を探るためには、これらを考慮した解析が今後必要である。

VI. 結論

本研究は、「多様な動きをつくる運動」用具を操作する運動の学習指導要領第3.4学年に示されている内容の各動きについて、小学校教員の動きの指導及び評価の意識について調査し、その実態と傾向を明らかにすること目的とした。

その結果を分析したところ、以下のようにまとめられた。

- 1) 本研究で対象となった教員は、用具操作の運動の各動きの指導と評価は、概ねできると捉えている傾向だった。また、動きの評価よりも指導に難しさを感じている実態が伺えた。
- 2) 縄、フープ、ボールの3つの用具を比較すると、フープの動きの指導や評価は、他の用具に比べて難しさを感じていた。これは教員の動きのポイントやコツに関する知識が十分に理解できていないことや、学校現場での授業実施の実態も関連があることが推察された。
- 3) 各動きの回答結果では、縄の後ろ交差跳び、フープの足回し、床転がし〜フープくぐりが難しいという回答だった。これらの3つの動きはいずれも複合的運動であり、難易度の上がった動きに対して、教員は指導や評価に難しさを感じていることが想定された。
- 4) 教員歴による回答傾向は、動きの指導は教員年数による差異はなく、動きの評価は教員歴10年未満が教員歴11年以上に比べて難しさを感じているという結果となり、教員は自身の経験知を元に子どもの動きを評価していることが示唆された。

前述したように、これまで本領域では、困難さや取り扱いづらさが指摘されていたが、本研

究で、何に困難感を持っているのかを調査した結果、授業で行う動きの指導や評価は概ねできていると感じている中で、フープを用いた動きや複合的な動きに対して相対的な難しさを感じており、動きの出来栄えについては経験に基づいて評価しているといった実態が明らかになった。

本研究の結果から、今後、小学校中学年における用具を操作する運動については、動きの指導と評価を検討していく際に、フープを用いた動きや複合的な動きをその対象とする必要がある。また、教員歴10年以下の若い教員に対しては、動きの評価に関する情報を提供していく必要があると考える。

また、中学年の体づくり運動領域において、児童が多様な動きを身に付けていくためには、教員に対してより具体的な動きの指導や評価に関する情報提供は大切であり、本研究の結果を踏まえて、フープを用いた動きや複合的な動きを踏まえた授業実践の研究を充実させていくことが今後の課題であるといえる。

謝辞

本研究は多くの皆様にご支援いただきました。調査にご協力いただいた教職員の皆様、関係諸機関に心より感謝いたします。

注

- 1) 体づくり運動は学習内容が多岐にわたり、単位の中で学習指導要領に例示されているすべての運動を実施することは難しいため、調査対象となった教員が、項目として設定した動きの指導経験がないことが想定された。それらを考慮して設問文には「小学校中学年児童へのこれまでの指導経験から各動きの指導（評価）の易しさ・難しさを下記よりお選びください。対象学年への指導経験がない先生は、児童に指導（評価）することを想定してお選びください。」という設問文により回答を求めた。
- 2) 本研究では、長野（2021）が学校現場の教員が授業構想する際に参考にする資料として報告している、学習指導要領解説体育編に着目し、そこで示されている動きを調査項目とした。学習指導要領解説体育編では、以下の運動例が例示されている。
 - 用具をつかむ、持つ、降ろす、回すなどの動きで構成される運動
 - ・大きさや重さの異なるボールやフープなどの用具を片手でつかんで持ち上げたり、回したり、

降ろしたりすること。

○用具を転がす、くぐる、運ぶなどの動きで構成される運動

・ボールをねらったところに真っ直ぐ転がすこと。

・フープを安定して転がし、回転しているフープの中をくぐり抜けたり、片足を入れてステップを踏んだりすること。

・ボールを両膝や両足首に挟んだり、友達と体で挟んだりして、落とさないように運ぶこと。

○用具を投げる、捕る、振るなどの動きで構成される運動

・相手に向かってボールや輪を投げたり、投げられたボールや輪を手や足で捕ったりすること。

・紙で作った棒やタオルなど、操作しやすい用具を振ったり、投げたりすること。

○用具を跳ぶなどの動きで構成される運動

短なわでの前や後ろの連続片足跳びや交差跳びなどをする。

・長なわでの連続回旋跳びをすること。

○用具に乗るなどの動きで構成される運動

・補助を受けながら竹馬や一輪車に乗ること。

・座ったり弾んだりできる大きなボールに乗って、軽く弾んだり転がったりすること。

この中から、高田（2017）の先行研究をもとに、学校現場で実施件数の多い、フープ、ボール、縄を使った動きを抽出した。さらに教師が一人の児童に対して指導や評価を行う動きを抽出するため、複数人で実施する長縄跳びや二人組での用具の投げ受けといった他の影響を受けてしまう動きを除外し、調査項目とした。それらを選定した結果、学習指導要領解説体育編に記載されている動きは、用具によって種類や数に違いがある為、フープの動きが6つ、ボールの動きが2つ、縄の動きが4つであったことから、合計12の動きを調査項目とした。

参考引用文献

- 深谷秀次・早川健太郎・渡部琢也（2016）小学校における「体づくり運動」の状況—教員の意識調査を通して—。子ども学研究論集，8：5-20。
- 伊藤久仁（2018）体づくり運動授業のこれまでとこれから。体育科教育学研究，34（1）：38-43。
- 嘉数健悟・岩田昌太郎・木原成一郎・徳永隆治・林俊雄・大後戸一樹・久保研二・村井潤・加登本仁（2015）中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究—教職歴の差異による悩みに着目して—。『沖縄大学人文学部紀要』17：39-48。
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版社。
- 文部科学省（2019）学校体育実技資料第7集，体づくり運動—授業の考え方と進め方（改訂版）—，東洋館出版社。
- 文部科学省（2020）小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック中学年（第3学年及び第4学年），

- 株式会社アイフィス.
- 長野康平・篠原俊明・中村和彦 (2021) 小学校教員の体づくり運動領域における指導実態と意識：所属研究部と教員歴による検討, スポーツ教育学研究, 41 (2) : 49-66.
- 岡出美則・友添秀則・岩田靖共著 (2022) 体育科教育学入門, 大修館書店 : 95-103.
- 岡出美則・友添秀則・松田恵示・近藤智靖 (2015) 新版体育科教育の現在, 創文企画 : 179-180.
- 清田美紀・本多壮太郎 (2019) 体づくり運動に関する論点整理と実践上の課題について, 福岡教育大学紀要, 68 (6) : 1-7.
- 篠原俊明・長野康平・野井真吾・中村和彦 (2024) 小学校低・中学年の「体ほぐしの運動(遊び)」と「多様な動きをつくる運動(遊び)」の指導における小学校教員の意識—教員の体育に関する専門性の違いによる検討—, 体育科教育学研究, 40 (2) : 47-73.
- 白旗和也 (2013) 小学校教員の体育科学習指導と行政作成資料の活用に関する研究, スポーツ教育学研究, 32 (2) : 59-72.
- 白旗和也 (2015) 体育教育学学会第19回大会プロジェクト研究報告体づくり運動領域, 体育科教育学研究, 31 (1) : 68.
- 鈴木聡 (2011) 教師の成長における授業研究の機能と体育科授業研究の特徴—授業研究会に参加する小学校教師への意識調査を手がかりとして—, 学校教育学研究論集 23 : 83-95.
- 高田康史・筒井愛知 (2017) 岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察, 吉備国際大学研究紀要, 27 : 177-188.

2024年11月8日受付

2025年9月19日受理